

新評論 2000円
弦書房 2100円

平川敬治著

「魚つかみ」を楽しむ 魚と人の新しいかわり方 中島経夫／うおの会編著
魚と人をめぐる文化史

評・三浦 佑之（古代文学研究者）
立正大教授

魚という漢字は、ウオともサカナとも読む。新評論の本の表題はウオと読み、弦書房の本の表題はサカナと読む。何が違つかといえは、ウオは川や湖沼や海を泳いでいる生きた

ウオから生まれるサカナ

メがおり、ボラは海と川とを行き来し、有明海にはタコ・クロダイ・トビウオが泳ぐ。それら豊かな川や海の生き物たちを手に入れるために技が磨かれ、さまざまな料理が生まれる。そこに文化が生まれ、文化に組み込まれた魚はサカナになる。

一方の「魚つかみ」を楽しむは琵琶湖博物館の設立に呼応して



魚をさし、サカナは調理されてお皿の上に乗せられた魚をいう（サカナの語源は「酒+菜」）。現代語では混用することも多いが、2冊の書名の区別は、内容にほぼ対応する。

『魚と人をめぐる文化史』は、有明海に流れこむ筑後川流域における魚と人との歴史や生活を、ユーラシア大陸全体を視野に入れて論じている。川の本流に棲息するアユ・コイ・ウナギ・スズキなど商品価値の高い魚を求める漁師はもちろん、農民もまた、田に水を引き込む水口や支流の川でフナ・ドジョウ・ナマズなどを漁って生活を支える。上流部にはヤマタロウガニ・ニジマス・ヤマ

読みながら写真や挿絵を眺めていたら、小さいころ田舎の谷川で一日中遊んでいた夏休みを思い出した。大人たちはだれも、危ないからやめろとは言わなかった。この本には、川での危険回避の方法もくわしく説明されているので心配はいらない。

これからしばらくは、おいしい肴をつまみに熱燗を味わい、水がぬるんだら、きれいな川を探して魚つかみに挑戦してみよう。

◇なかしま・つねお 1949年、東京都生まれ。うおの会名誉会長。◇ひらかわ・けいじ 1955年、福岡県生まれ。元九州大教育研究センター講師。